

韓国はいかにして経済危機を脱するか

現代コリア研究所 事務局長 西岡力氏

5年前に金泳三氏が大統領選挙で勝利した頃、韓国は好況下にあり、いわゆる3K作業を嫌い、この「韓国病」を退治するのだというスローガンで金泳三氏が立候補した。しかし、当時は円高が進み、韓国製品は世界中で日本製品に置き換わる勢いで急成長し、94年から95年は未曾有の大好況に沸いた。特に95年は半導体の売上が急増し、三星電子は税引利益でトヨタ自動車を抜き、日本何するものぞという勢いであった。一人当たりのGNPが1万ドルを超え、OECDに加盟し、一気に先進国入りした。

しかし、この好況は見せ掛けのものであった。96年に円安になると一気に輸出競争力を失い、花形だった半導体の輸出も大打撃を被った。この結果、貿易収支はなんとか黒字を保てたが、昨年は経常収支が237億ドルの赤字に転落した。

当時の判断では、韓国の対日競争力は100~110円/\$の為替レートが限界であった。

さらに80年代、次の全大統領の時代に、日本を意識した差別的な規制を温存した。それは韓国にとって貿易赤字になっている商品については許可制を導入し、該当企業からの申請があれば輸入にストップをかけられるというものである。これに対し、日本政府は何の抗議も行なわなかった。これは排除ではないので、外見上は自由貿易を標榜した。

このように保護された企業は、自助努力をいつしか怠っていった。この保護のもと、財閥企業は甘い経営になって行ったのである。

韓国の見せかけの経済発展の理由は、対日輸入規制と円高によるものであった。現在のウォン安は相対的に円高の効果があるから、経済は回復基調にあるか。答えはNoだ。

韓国がバブルで浮かれている間に、日本企業はASEAN諸国に生産を移管し始め、結果としてASEAN製の日本製品の価格競争力は韓国をしのいだ。加えて、韓国は80年代から賃金が急上昇し、生産性は逆に下がった。円高が極端に進めば別だが、神風待望型経営姿勢では解決されない。

韓国は経常赤字を埋めるのに外債を頼った。なぜこうも簡単に外債が入ってきたのか。総合金融会社が勝手にホンコンやシンガポールで短期外債を調達し、財閥に長期で貸し与えたのだ。実は、傘下に銀行を持たない財閥は、資金不足をノンバンクに頼らざるをえなかったのだ。ノンバンクも国の保護の下にある財閥にならいくらでも貸出を行なった。

97年末の外債残高は1554億ドルで、その45%が1年未満の短期外債である。昨年11月にIMFに支援を依頼したが、実は、金大中氏は、国家の金庫がこれほど空だったとは知らなかったのだ。

この上、中国が元を切り下げたら韓国経済は惨憺たるものになる。